彼への想い

三越　晴哉

桜舞……ってはいなかったけれど、暖かな風が頬を撫でる頃、私は念願だったＩ大学に入学した。高校三年の夏休みの模試でＤ判定を貰ったときは泣きそうになったけれど、諦めずに努力した結果、見事前期日程で合格を勝ち取った。試験が終了してから合格発表まで眠れない日々が続いたけれど、合格を知ったときにはそれらの苦労を全て忘れてしまうくらい心が飛び上がったものだ。

それから急いで入学やら一人暮らしやらの手続きを済ませ、晴れて大学生となった私は毎日のようにＩ大学の正門をくぐっている。すでに大学生活は始まって一か月が過ぎようとしており、やっとのことでこの新たな環境にも慣れてきた。

そんな私には、今、すごく気になる人がいる。あまりにも惹きつけられて、授業に集中できないほどである。大学の授業は専門的で、きちんとした姿勢で取り組まなければ単位を落としてしまうと先輩には言われた。でも駄目、彼のことを少しでも思い浮かべると、私の頭は全てがその思考で埋め尽くされてしまう。彼のことをもっとよく見つめたい、彼のことをもっとよく知りたい、彼ともっと一緒に居たい。

彼と初めて会った……いえ、あれはみたというべきだろう。何故なら私が一方的に彼をめにしただけで、彼は私のことなど全く気がついていなかったのだから。とにかく、彼を初めて見たのはＩ大学の二次試験の日だった。その日は受験生と試験官の先生方しかいない日のはずなのに、何故か彼は構内にいた。そして何をするでもなく、遠くを見つめたまま静かに立っていた。私の心はあの瞬間、彼に盗まれたのだと思う。ついさっきまで雪の残る道を「滑らないように」って念じながら慎重に進んでいたというのに、彼のあの凛々しい顔が眼に映った途端、その足をぴたりと止めてしまった。そして数秒間ほど経ってから我に返り、足早に試験会場に向かった。その後はこの重要な本番の日に、いったい何をしているのかって自分に叱咤激励しながらテストに臨んだ。受かったからよかったものの、もし不合格なんて言い渡されていたら、今頃彼を呪いながら藁人形でも握りしめていたかもしれない。……可能性の話だけれど。

ここまで一人の人物が気になることは初めての経験だ。何故こんな心理状態に陥っているのか、自分で自分が理解できない。だから私はここで、一つ整理してみようと思う。彼の何が私を惹きつけるのか、何が引き金となって私を惹きつけるのか。それをできるだけ客観的に検証していきたいと思う。彼の持つ特徴を一つ一つ取り上げ、他人の意見も参考にしながらまとめてみようと思う。そうすればきっと、分かるだろう。何故私は、彼が気になるのかが。私の心にあるこの想いは、いったい何なのかが……。

［特徴その一――クール］

入学してから分かったことだけれど、大学は高校までのようにみんなが一斉に授業を受けるのではなく、講義を聴いている人たちもいる一方、大学構内をぶらぶらと歩いたりサークルに勤しんだりする人たちも一方にはいる所だ。どの大学にも共通のことなのかは知らないけれど、少なくともＩ大学や同じ市内のＴ大学はそういうシステムとなっている。学生は好きなように授業を選択し、空いた時間は自分の時間として自由に活用するのだ。

ただ自由な活用といえば聞こえはいいけれど、現実にそれを有効に消化することは難しい。特に一コマだけ暇なときなど、何かをするには短いけれど何もしないと長いなと感じ、結局は中途半端に友達とのお喋りへと移っていく。別に友達と過ごす時間が無駄だと思っているわけではない。けれど後で思い返すと、もっと他の使い方もあったのではないかと考えてしまうときがある。後悔は何も生まないと分かっていながら悔いてしまう。そしてそのことにまた心を悩ませる。悪循環……。

でもそうした時間の過ごし方をしているのは、決して私一人ではない。大学内を見渡せば同じように友人とのふれあいに興じる人を多く目にすることが可能だ。また友達に聞いたところ、私と似たようなことを考えたことがあるとも答えてくれた。決して一人ではない。その思いは私の心をほんのりと温めてくれた。

ただ彼は違う。私は彼が誰かと楽しそうに話している様子を目撃したことがない。彼はいつも口を固く結び、どこかを見据えながらクールに佇んでいる。整った顔つきは常に変わらず、私のように悩んだり心を激しくひきつけられたりなどは決してしないように見える。他の人たちがどれだけ周りでぺちゃくちゃ口を動かしていても、彼はそれらを気にもせずクールに立っている。私は彼の、そのクールな横顔が気になるのだろうか。

ある人に何故彼は常に無口でクールなのかと尋ねたら、その人は笑いながら「奴には一緒にお喋りするような友なんていないんだよ」と答えた。それは本当なのだろうか。だとしたら悲しい。友達がいないなんて、とても悲しい。私が友達になってあげたい。友達になって、いろいろお話したい。……でも結局、私にはそれだけの勇気がない。話しかけたのに無視されたらどうしようか、それが怖くて自分から向かっていけない。彼の声が聞きたいのに、彼とともに笑い合いたいのに、きっかけを探しまわるだけで行動に移そうとはしない。臆病者の私は彼を見つめるのみで、それ以上前に進めない。

彼の一つ目の特徴はクールであること。それが私にどのような影響を及ぼしているのか、またはいないのか分からなかった。次もまた彼の特徴を挙げ検証していく。

［特徴その二――鍛えられた体］

こう書くとまるで私が彼の、体のことだけ取り上げて見ているみたいであれではあるけれど……ただあくまで検証していく上での一要素に過ぎないものなのだ。いや勿論ぶよぶよと贅肉だらけの体よりは、引き締まった筋肉の方がいいけれど、そういうことではなくて……。とにかく、彼の第二の特徴として鍛えられた体というものを提示して見る。

大学に入ってから体調を崩す人は多い。一人暮らしになってから食費を減らして生活費を節約しようとする人がいたり、自由に時間が作れることでいい気になって生活サイクルを乱す人がいたりするからだ。または偏食や寝不足、過度の飲酒や不摂生なども原因として考えられる。また高校までスポーツに汗を流していた男子などには、その頃ほどの運動はしないのに胃袋だけは変わらず大きく、気が付いたときには取り返しがつかないくらい横に広がった体格となっているというケースもある。そうした様々な要因が渦巻いており、私の周りの友達でも、何人か体を壊してひどい目に遭った人がいたものだ。

そうした体の不調は表面に表れるものだ。主にお腹や肌や瞳にだ。急にお腹が出てきたり肌がかさかさになったり瞳が充血したりする。そういう私も最近外食に頼ることが多く、この前体重を量ったら……。

それと比較して、彼は全くといっていいほどの完璧な肉体を持っている。自由な大学生活で堕落することもなく、おそらく昔からあのままの体型を留めている。彼のあの鍛え抜かれた体は、彼の精神の高貴さを表現しているように私には思われる。決して自身の道を見失わず、やるべきことを成し、常に前を向き続けている。

ここまで記して分かったことがある。私は彼のその体だけを見て彼に思いを巡らせようとしたのではなく、その背後にある彼の強靭な精神にこそ注目していたに違いない。本当に強い人は体だけでなく心も強いのだ。彼はまさしくそれを体現した存在なのだ。

ただある人はこう言った。「確かに素晴らしい肉体の持ち主だ。俺がああなろうとしたら、それはとても大変なことだろう。だが逆に言えば、奴はあの体でしかいられないんだ」と。あの体でしかいられない、それはつまりあれ以上太ることも痩せることもできないということだろうか。それは何故だろう。彼は自分が今の状態以外になることが許せないのだろうか。それは彼の誇り高き精神の表れなのだろうか。それとも、他の何か理由でもあるのだろうか。

分からない。彼と話す勇気もない私は疑問が増えていくばかりだ。もし彼が何か悩みを抱えていたら助けてあげたいとも思うのだが、それもできない。

……とにかく、最後の検証に移る。

［特徴その三――顔が広い］

一つ目の特徴で挙げたように彼はクールで無口だ。しかしその割に交友関係は恐ろしく広い。私は彼のことを調べるためにあらゆる方面に聞き込みを開始した。私自身の友人知人は勿論のこと、その彼女たちから紹介してもらった他のＩ大生、さらには先生方やＯＢ、ＯＧの方々にまで調査範囲は広まっていった。すると驚くことに、その人たちの全てが彼のことを知っていたのだ、これは顔が広いとかそういうレベルではない。テレビで活躍する芸能人や永田町に巣くう人たちでさえ、これほどの知名度を得ることは難しいのではないか。

ここで一つ疑問が浮かぶ。彼はいったい何年生、いや何歳なのだろう、と。ＯＢ、ＯＧが知っていたのだから、少なくとも私と同学年ということはないはずだ。なのにあの二次試験の日、受験生に混じって大学構内にいたのではあるけれど。果たして彼は何年前からこの学校にいたのだろうか。聞いたところによると、Ｉ大学には最大で八年間いられるらしい。いや休学を利用したり院生になったりすれば更に長い年月大学に在籍することが可能なはずだ。もしかしたら彼は学生側ではなく、教授側の立場とも考えられる。だとすれば何年だろうと大学に居座ることもできるようになる。

……彼が教授という見解は、少し突拍子のないものだったかもしれないと今反省した。彼の美しい顔は年齢を読み取ることを著しく困難にしているけれど、まさかそこまで年をとっているとは思えない。時折若々しい先生もいるけれど、彼はその人たちとも違う感じがする。やはり学生と考えるのが妥当だろう。

すると何故、彼はここまで交友関係が広いのだろうか。大学には高校までとは違い、全ての授業を一緒に受けるクラスメイトという存在はいない。そのため友達を作ることは難しいのだ。だから皆クラスより小集団のゼミで仲間の輪を広げたり、サークルに所属して同じ趣味の同士を見つけたりする。しかしそれだけで、ここまでの知名度を獲得することができるのだろうか。

ある人は語った。「一度でもＩ大の門をくぐったならば、奴のことを知らない者はいないだろう。それほどのインパクトを奴は持っている。だが悲しいかな。奴はそれほど多くの目に触れていながら、誰と話すこともかなわない宿命なんだ」と。非常に広く、非常に浅い交友関係を持つ彼。私もその、広くて浅い領域にいるなんでもない存在なのだと思い知らされる。皆が彼を拒絶しているのか彼が皆を拒絶しているのかは知らない。だけど私もその一人……。

彼の三つ目の特徴として顔が広いことを提示し、それについて検証した。しかしその結果は、彼の心の哀しみまで浮き彫りにしてしまったように思う。

［結論］

以上、彼に関する特徴とその検証をまとめてみた。クール、鍛えられた体、顔が広い。どれも彼を他人と差異化するのに、十分すぎる材料だ。彼ほどクールな人はいないし、彼ほど鍛えた体を維持している人にも出会ったことがなく、彼ほど顔が広い人も存在しないだろう。

これらの検証はもともと、何故私がこれほど彼に惹きつけられているかを理解するために始めた。一つ一つの特徴から紐解いていけば、最後には自身の心に眠る解に辿りつけるのではないかと考えたのだ。しかし全てが終わって振り返ると、私がまだ何も分かっていないことだけが分かった。彼についての薄っぺらな情報だけが蓄積されていき、大事なことは何一つ解明されていない。

いや一つだけ分かった。それは私が臆病者ということだ。彼を調べるためにあれほど沢山の人に出会い、話し、協力を得たというのに、彼本人には全く接触していない。精神が大きく掻き乱されるほど気になる存在なのに、彼に対して一歩を踏み出そうとはしない。とても、とても臆病な存在……。

三つの特徴の検証を通して表面的にではあるが知りえたのは、彼が孤独ということだ。Ｉ大学に行けば常に彼を目にすることはできる。しかし彼が誰かと仲良く話していることはない。何故彼はそうあり続けるのか。何か理由があるのだろうか。私はそれが知りたい。でも尋ねることができない。私は臆病者で怖れているから。私も他の人たち同様に、彼の目には映らないのではないかと。

試してみなければ分からない。もしかしたら気がついてくれるかもしれない。私に向かって、誰も見たことがない笑顔を浮かべてくれるかもしれない。でも……。

一度気持ちを落ち着け、当初の疑問を自身の胸に問いただす。だが幾ら繰り返しても分からず、自分で自分が理解できないもどかしさに心を曇らせる。何故こうまで彼が気になるのか。私の奥にあるこの想いは、いったい何なのか……。

やはり彼に話しかける必要があるようだ。臆病者の私を捨てて、勇気を胸に足を踏み出さなければ。そうすればきっと答えが見つかる。きっとこの想いも分かるはず。

私は力いっぱい走り出した。目指すは彼の所。彼がいつも立っているＩ大学の図書館前。

彼の前に辿りつき急いで呼吸を整える。高鳴る胸の鼓動を押さえ込みゆっくりと彼を見上げる。そして遠くを見据えたままの彼に向かって、思い切って口を開いた。

「あの、始めまして、私……」

～『覇者』への想い～